

天空の城「竹田城」と

いずし たんばささやま 出石・丹波篠山の城下町を巡る

11月30日～12月1日にかけて日本のマチュピチと言われる竹田城や、出石・丹波篠山を巡るツアーに参加した。このツアーは天橋立、ライトアップされた嵯峨野のトロッコ列車にも乗車するという欲張りなコースになっているが、今回は竹田城と出石・丹波篠山の城下町を中心に記すことにした。

1 五万八千石だった「出石藩」

① 出石への道は雨に注意

最初に立ち寄った天橋立から、県道2号と国道482号を經由して豊岡市出石町へ向かう。途中SAでもらった高速道路マップを見ては、どの辺りを走っているのか確認し、



四角の上から出石城、竹田城、篠山城の位置

移り行く景色を眺めた。ほとんどが山と山に囲まれた狭い山あいに行く、数年前の豪雨では観光バスが水没してしまい、乗客が屋根に避難して救助された地域だ。川の流れに沿って道路は続くが、バスの屋根まで水につかるとは想像ができない。この辺りに降った雨水はV字型の地形によりすべて川と道路に押し寄せるのだろう。川は太田川そして出石川と名前を変えて、豊岡の街をぬけて日本海へ注いでいる。

それと、この辺りは「コウノトリ」の生息でも知られているが、田んぼに水が張られている所がたくさんあった。おそらくこれはドジョウなどの生育をしている

コウノトリの餌場ということかな。1時間ちょっと走って14:00ころに豊岡市出石町に到着した。ここ出石はそばが有名で、「皿そば」で知られるがお昼を食べてきたところであり、お店に入るのは遠慮した。

② 観光客でにぎわう但馬の小京都「出石」

出石城跡の駐車場に着くとすでに大勢の人たちが散策している。添乗員の案内で町のシンボルである時計台の「辰鼓楼（しんころう）」まで行く。11月最後の日曜日であり、



竹田城のお蔭でこのすさまじい賑わいなのだろうか。行きかう人々の波をかき分けるようにして歩くと、高さ13mの黒い鼓楼がそびえている。パンフレットに必ず登場し出石になくってはならない存在となっている。当初は太鼓を鳴らして時を知らせていたが、明治14年にこの城下町で開院していた医師池口忠恕(ちゅうじょ)が、大時計を寄贈してからは時計台として親しまれ、今の時計は三代目と言う。

ここからは自由散策となり、昔の町並みを再現した大手前通りを歩いた。土産物屋と「そば」の看板があちこちに並ぶ通りは、「鋳物師町」「鉄砲町」と続きこの辺りまでは人の波が続いている。資料館があると言うので右折すると、そこに「鋳物師町発祥の跡」の石柱が立っていた。その隣にムシコ窓の家があり、これが旧福富家の出石資料館だった。入場料は300円と表記されていたがその下に65歳以上は150円とある、何と嬉しいサービスではないか。鋳物師町だけに当家の主も代々鍋屋惣兵衛を名乗っており、江戸時代はナベ・カ



マと言った鋳物を扱う商家であったらしい。この家は二階建ての主屋と離れがあり、間には庭を配置し、その先にも庭を配置して土蔵が並ぶ。離れがお客様用に使われ、門と玄関が別に用意された豪邸である。しかし、明治9年この城下町を大火が襲い、2/3が焼失してしまいました。その後明治25年に離れが建てられ、明治45年に主屋が建て直されたという。

③ 出石藩の歴史

出石の歴史は古く「古事記」「日本書紀」にも登場する古い町です。但馬開発の祖神「天日槍」がこの地を開いたと伝えられています。

山名一族の本拠-----室町時代には山名時氏が但馬を制圧、その子の時義が隅山に本城を構えたことにより、出石は但馬の中心として繁栄しました。その後、時義の孫、宗全(持豊)は応仁の乱を引き起こし、西軍の大將となりました。しかし、戦国時代に入り織田軍に攻められ隅山城は落城、その後、有子山に城を移しましたが再び攻められて有子山城も落城しました。

五万八千石の城下町でした---その後江戸時代に入り慶長9年(1604)山頂の有子山城を廃して、小出吉英が山麓に平山城を築城、これが今の出石城で周囲に城下町が形成されました。一国一城制による但馬唯一のお城でした。元禄10年(1697)に松平氏が移封されましたが、宝永3年(1706)に信州上田の仙石氏とお国替えになりました。五万八千石の城下町でしたが、途中、仙石騒動により三万石に減封されたものの、仙石氏は7代にわたり出石藩を治め明治に至りました。この仙石騒動と言うのは「三大お家騒動の一つ」といわれるもので、事件の発端は二人の家老である仙石左京(改革派)と仙石造酒(保守派)の勢力争いでした。お家乗っ取りの疑いで幕府の裁きを受け、出石藩は三万石へ減封されました。結果、出石藩の歴史は小出氏9代で100年、松平氏1代で10年、仙石氏が8代で160年を治め、明治に至りました。(この項は出石観光ガイドマップより)

④ 土壁がむき出しになった酒蔵



出石資料館



出石酒造の酒蔵

資料館の方に酒蔵を見て行くと良いと教えられ、通りに出ると赤い土壁がむき出しになった蔵が建ち並んでいるのが見えた。このような仕上げ方があるとは思えず、なぜこ

のようにしてあるのか不思議だった。通りを右折して建物の正面に出ると、現在も地酒「楽々鶴」を販売する出石酒造だった。試飲もできるらしいが立ち寄ることはせずに行くと、さきほどのように赤い土壁が少しだけ露出した建物があった。やはり先ほどの蔵は上塗りの壁がはがれた酒蔵だったのだ。パンフレットを見ると「赤い土壁が長い年月を経て、まるで人の表情のような豊かな味わいを見せてくれます」と旨い説明がされている。ここから辰鼓楼に戻り駐車場の方に向かうと、道沿いに街の雰囲気合わせた立派な市役所がある。観光以外にこれと言った産業があるわけでもないのに、このにぎわいと言い、街の造りと言い大したものと感じる。この様を見て東浦は何を学ばよいのだろう!!

⑤ 本丸跡に「出石そば発祥の碑」

そんなことを思いながらお城跡へ向かう、谷山川からすぐ石垣が積まれて出石城はあり、川を外堀として配置している。その石垣の横には杉木立がおおう階段が上に向かいそこには稲荷神社に続く赤い鳥居が何本もたち並ぶ。階段と赤い鳥居、それに石垣のおりなす風景はすばらしく、日本の昔から続く風景であり心落ち着くものがある。この階段を上がれば稲荷神社があり、その昔にはその辺りかあるいはさらに上に「有子山城」があった。



階段の途中から出石城本丸跡へ入っていく、見晴らしの良い広場に一つの建物があって前に石碑が立っている。何かと思い見てみると「出石そば発祥の由来」で、建物は感応殿といい城主仙石氏の藩祖権兵衛秀久公(信州小諸城主)を祀っている。蕎麦については、四代政明公は大変な蕎麦好きで宝永三年(1706)出石の松平公とお国替

えて出石に入部のさい、信州一のそば打ち名人を伴い入国して蕎麦を当地に広めた。永年にわたり改良と技術研鑽を重ね、出石焼の小皿に盛りつける独特の「出石皿そば」を創りだし、今日に受け継いできました……とある。信州の蕎麦がここ但馬の地で、新しい

食文化を創り出したと言うのだから、やはり蕎麦は信州かな。そんなことを考えながら本丸跡から降りてくると二の丸上の郭で、その隅には白い漆喰仕上げの隅櫓がある。それを支える石垣とその下には二の丸下の郭があって、その石垣が高低差で続く景色は圧巻ですばらしい。この石垣の景色こそ城跡であり、東浦の緒川城跡も何かアピール出来るものがほしいものだ、と思いながら出石城跡を後にしました。

2 予期しなかった収穫

今回のツアーで予期していなかったが、私としては興味深いことを知ることができました。それが次の二点です。

①日本三大ネギの「岩津ネギ」

初日の予定を終えて今日の宿は峰山高原の「峰山高原ホテル・リクラシア」、住所は兵庫県神崎郡神河(かみかわ)町。鉄道では山陰本線の和田山駅と、山陽本線の姫路駅を結ぶ JR 播但線の中ほどに位置する寺前駅から、道路では播但連絡道路の神崎南ランプウェイを降りて、兵庫県中央の鳥取との県境に広がる峰山高原の最も高いところまで登った所にある。すぐ近くの峰が 1,077m あるのでホテルも 1,000m 近い高さにある。出石からの移動は国道 312 号から、自動車専用の近畿豊岡自動車道に入り和田山 JC で播但連絡道を走る。この地区はとても田舎と思っていた、確かに山間部に集落が点々とあることには変わりはない。しかし、これらを結ぶ道路網がとても良く整備されているのに驚いた。道路は片側一車線だが、交通量からすれば何の問題もなく、とても便利に行き来できるのだ。



ホテルに着いた時には冷たい小雨が降り、明日が思いやられるお天気だった。案の定翌朝はガスが立ちこめ今にも大雨になりそうな雰囲気だった。しかし、山を降りて行くと山にガスがかかる様は東浦には見られない、とても趣のあるものだった。そして、播但連絡道を走る頃には雲は広がるものの、雨は大丈夫と思える雰囲気。

8:00 にホテルを出て 1 時間弱で朝来(あ

さご)市の PA で休憩となる、これはお手洗いもあるがお土産を買うためでもあった。道路の反対側に集約された PA の売店をのぞいて一つ発見した、朝来(あさご)市特産の「岩津ネギ」でこれは博多の「万能ネギ」と群馬の「下仁田ネギ」と並ぶ、日本三大ネギの一つだと言う。その歴史は古く、江戸時代に隣町の生野代官所の役人が京都に出向いた際に、九条ネギの種を持ち帰ったのが始まりと言う。その後、生野銀山の労働者の冬の重要な野菜供給源として定着し、栽培されるようになりこの地方独特の土壌と気候によりおいしい「岩津ネギ」になったという。

② 生野銀山と姫路の港を結んだ馬車道

さらに、ここでパンフレットを一つ見つけた。プロジェクト未来遺産「銀の馬車道」日本初の高速産業道路を未来につなぐ、の文字が目を引き手に取った。それは生野銀山と



姫路の港を結んだ道路のことだった。銀山と言えば「石見」と「生野」は覚えており、石見銀山は世界遺産に指定されている。その代表的な銀山のもう一つの生野銀山が、この先の竹田城との中間にあったのだ。さらに、「生野」といえば百人一首に出てくる「大江生野の道の遠ければまだふみも見ず天橋立」でも知られています。この辺り生野銀山から播但線を挟んで、少し西には「神子畑鉱山」もあります。銀の馬車道は正式名称を生野鉱山寮馬車道といい、生野銀山と^{あまのはしだて}飾磨津(現姫路港)の間約 49km を結ぶ馬車専用道路として、フランス人技師長レオン・シスレーのもと、当時の日本では最新の舗装技術を導

入して 3 年がかりの工事を経て、明治 9 年に完成しました。日本初の高速産業道路とも言われ、生野銀山の採掘・精錬に必要な機械や日用品などの物資運搬と、産出された銀の輸送ルートとして大きな役割を果たしました。

しかし、明治 28 年の播但鉄道(現在の JR 播但線)の開通により、徐々にその役割を譲ることになりました。完成から 135 年以上が経過した今では、大部分が国道や県道などに姿をかえましたが、「銀の馬車道」でつながれ発展してきた沿線には豊かな自然と歴史が息づいています。この生野銀山の歴史は古く平安時代に銀を発掘しはじめ、さらに安土桃山の天文 11 年(1542)山名祐豊による開発が始まりました。そして、織田信長・豊

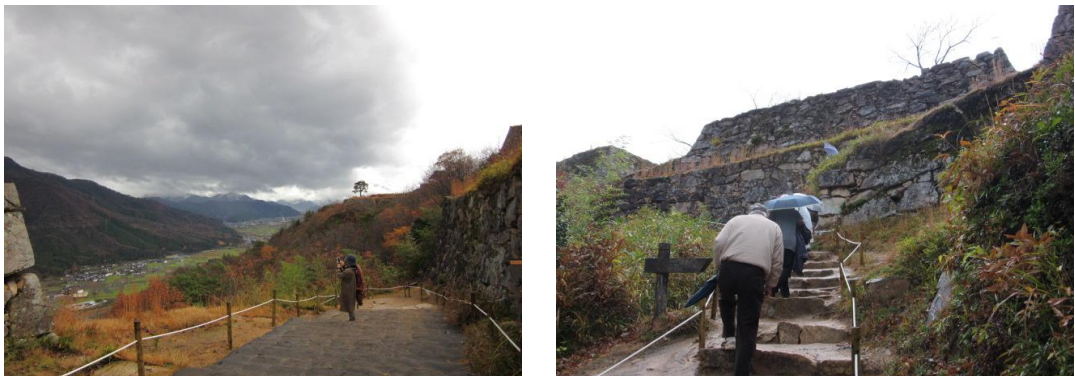
臣秀吉がともに生野に代官を置きました。江戸時代になると佐渡金山、石見銀山と並び天領として徳川幕府の財政を支え、徳川家康が但馬金銀山奉行を置き、その後奉行を廃して代官を置いた歴史があります。明治元年には生野銀山は日本初の直営鉱山になりました。明治9年に馬車道が完成しその後民営化され、昭和48年(1973)に閉山されるまで430年間銀の産出が行われました。

三つの城下町を巡る旅で思いもよらず、我が国の銀産出の歴史に触れることができましたが、石見銀山のように世界遺産になって、坑道などが見学できるようになるともっとよいのにと思いました。

3 竹田城はまさに「天空の城」だった

① 本当に山の上にあった

9:30 ころ竹田城の山城の郷駐車場に到着しました、ここでマイクロバスに乗り換えて中腹の第二駐車場へ向かう。今回の旅の主目的が竹田城跡の見学であり、とても楽しみにしてきた。マイクロバスを降りて歩き出すとすぐに急な坂道になりなかなかきつい、おまけに雨もぱらついてきた。半数くらいの方は傘をさして、一部には用心してカップを着てきた人もいた。13分くらいだろうか上っていくと石垣が見えてきた、目標が見えると安心するので、そこからは眼下に広がる竹田の城下町や遠くに連なる山並みを鑑賞する余裕も出てきた。山と山に囲まれた狭いエリアに川が流れ、山裾に民家が集まっいて川沿いは農地になっている。水利を優先して大事な農地を配置してきた結果だろう、したがって大雨の時に民家が土砂災害に合う確率も高くなるのだと思う。



石垣にたどり着きましたが、まだまだ上です

三方に延びる尾根上に配置された城の、石垣下にたどり着くと雄大なパノラマが広がってすばらしい景色だ。しかし、それよりも何よりもこんなに高い所に石をはじめとする、材料の運搬はどのようにしたのだろう。(ガイドに聞いたら、石はこの場所で採取したもので、他所から持っていたものではないそうです)考えるだけでも気が遠くなりそうだ、石垣を上るとかなりの広場になっていた。桜の木もたくさん植えられており、花見のシーズンには大変な人気となることだろう。

②二万二千石だった竹田城

最近の竹田城は平成元年に映画「天と地と」、さらに平成 23 年の「あなたへ」の撮影ロケの現場になったことで、広く知られることになりました。その竹田城は...

竹田城の遺構-----この城は播磨、丹波、但馬の交通上の要地に築城されました。当初の姿は不明な点も多いが、石垣遺構周辺に存在する曲輪から判断すると、本丸・天守台・の存在する山頂部から三方に延びる尾根上に曲輪を連続的に配置した造りになっていますが、石垣はありませんでした。一方、識豊期以降の竹田城は、最も高い天守台(353.7m)をほぼ中心に置く石垣城郭となり、南には南二の丸、南千畳が、北には二の丸、三の丸、北千畳を築いています。

千畳というのは広い場所という意味のようです。

竹田城の歴史-----嘉吉元年(1441) 播磨地方の山名氏と赤松氏の間には深刻な対立が生じていました。竹田城はこの時、赤松氏に対する山名氏方の最前線基地の一つとして築城されました。

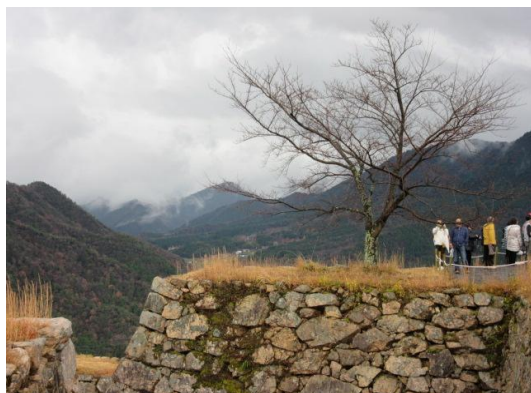
以後、太田垣氏が 7 代にわたり城主となりますが、天正 5 年(1577)羽柴秀吉の但馬攻めにより、羽柴秀長(秀吉の弟)が城代となりました。天正 8 年(1580) 羽柴秀長は出石・有子山城に入り、さらに、因幡・伯耆(鳥取県)へ攻めていくために、竹田城は秀長属将・桑山重晴に預けられました、この時所領一万石。さらに、桑山重晴が天正 13 年(1585) 紀伊和歌山城代に転じると、赤松広秀が所領二万二千石の城主となりました。その後、1600 年の関ヶ原の戦いに赤松広秀は西軍に属して参戦しましたが、西軍敗戦後に鳥取城攻めに加わるも大火の責任を問われ自刃し、竹田城は廃城となりました。

竹田城は昭和 14 年竹田町役場の所有となり、町村合併を経て現在は朝来市大字竹田(竹田財産区)の所有となっています。(この項は竹田城跡パンフレットより)

③ 石垣は穴太(あのう)積み

城跡に着いた時には雨も上がって、300m 余の高さから眺めるパノラマは絶景と言う

ほかない。マチュピチュには行っていないが、写真など見ており日本のマチュピチュと言うのもうなずける。石垣遺構周辺では多くの石取り場も確認されているそうだが、マチュピチュもそのように言われている。三の丸へ上がる所でガイドが石垣の説明をしていた、「この石垣は大津市坂本町に住む穴太(あのう)衆と言われる人々がもつ、石積み技法で造られた穴太積みです」。その特徴は石垣の両角に置いた角石にそって根石を並べて、その上の段は両角石の上になるべく大きめの石を置き、その間に大小の石をなるべく隙間のないように、且、水平に並べる。これを繰り返して高く積み上げるもの。さらに、石垣は台形を四面合わせた形で上部に平らな面を確保する、この時の四つの角は算木積みと言われる積み方が用いられる。石垣の角になる部分において、長方体の石の長辺と短辺を交互に重ねて行く技法です。これにより、石垣の強度が増し崩れにくくなります。



城跡から見る街並みと山並み

他にこの城の特徴としては、お城を火災から守るとされた「鯨瓦」が発見されています。頭が龍もしくは虎で体が魚という想像上の霊獣を模したものです。他にも朝鮮半島の造瓦技術で造られた、高麗瓦といわれる表面に方形の十文字の花弁状や、同心円状の叩きを施した瓦が見つかっています。

竹田城の縄張り(平面構成)の規模は南北 400m、東西 100m に及び、元のように造られている石垣遺構としては全国屈指のもので、平成 18 年には日本城郭協会より「日本 100 名城」に選定されました。山の頂を平にしてお城を造った人々の努力は「すばらしい」の一言に尽き、山々に囲まれて天空の城から眺める景色は絶景と言うほかないが、当時の武将たちは何を思ったことだろう。

この後竹田城をあとにして丹波篠山の城下町へ向かった。

4 天下普請によって築城された「篠山城」

① 町や村はなく「市」ばかりの山間地

地図を広げて意外に思ったことがある。最初の天橋立がある「宮津市」を出てから、走りぬけてきた途中には出石城のある「豊岡市」、政府が提唱した今回の「特区」に名乗りを上げている「養父(やぶ)市」、竹田城のある「朝来市」、これから通る「丹波市」さらに「篠山(ささやま)市」と山あいの地区ばかりなのに、「町」はなくていずれも「市」なのである。わが東浦は人口 50,000 人だが東浦町である。気になり調べてみると、宮津市は 18,577 人、豊岡市は 82,459 人、養父市は 24,538 人、朝来市は 31,120 人、丹波市は 65,077 人、篠山市は 41,709 人と分かった(いずれも 2014 年 11 月 1 日の推計値)。案の定一部を除いて人口の少ない「市」だった、でも豊岡市と丹波市は意外に大きな街だと分かった。しいて言えば、そこにしか集落がないのでその割に人口が多いということか。

篠山への移動も北近畿豊岡自動車道と舞鶴若狭自動車道を走って、丹波市をぬけて篠山市に入る。スムーズに移動して篠山城跡駐車場に 12 時 30 分頃到着した。

② ランチはすべて大盛りだった

篠山城の城跡の見学は後回しにして、まずは観光案内所に立ち寄り城下町を楽しむ「さんぼまっぷ」をいただく。ここからは自由散策となり、まずはランチの場所探しをする。洋風の大正ロマン館を目の前に見て進むと、目に入るのは「ぼたん(いのしし)鍋」の看板の多いこと、いずれも高級そうな雰囲気だ。中には「しし肉」の看板もあるが、お昼からごちそうのしし肉を食べる気にはなれず、探していると立て看板に「ランチ」の文字を見つけた。そこは大衆食堂らしい雰囲気があり安心してお店に入ることができた。周



りには役所が集まっているので、各役所の職員の人たちが利用するお店と見受けた。ランチを注文すると、「今日とはんかつとマカロニのサラダ、それにほうれん草の炒め物だよ」と言って食品棚から出して見せてくれる。OK とうなずくと、今度は「ライスは大・中・小があるよ」と言うので、すかさず「中」と答えた。でもだされたご飯のボリューム

ムは大と思えるほど、トンカツもかなりでかく小さくはないしサラダの量もかなり多い。思った通りで食べきれずに少し残してしまった、ごめんなさい。ご飯は小にしなくてはいけなかったと反省。でも、考えてみたらご飯だけはサンプルを見せてくれてはいなかったのだ...

③ 木造の旧裁判所は美術館

食事を終えてゆっくりマップを眺め、とりあえず今いる商店街の通りを歩く。そして、添乗員が話をしてくれた河原町妻入商家群を見学し、最後に駐車場のあるお城跡を見学することにした。

しし肉や蕎麦のノボリバタが目につく通りは、一直線に伸びており、マップからすると 900m ほどもある。白い漆喰仕上げの家も多く、商店街通りでも突飛な建物は建てないルールを守っているようだ。少し行くと「春日神社」の石柱と赤い鳥居が見えたが、神社は少し奥まった所にあるようだった。そのすぐ先の交差点角にとっても荘厳な建物が現



れた、前まで行くと武家の屋敷みたいな門がある。建物は「歴史美術館」だったが、説明板によると明治 24 年に篠山地方裁判所として建てられ、昭和 56 年まで使われていましたが木造の裁判所としては現存する中で最古のもので、重要建築物として保存するために内部を改装して美術館とした、と記されている。裁判所があったと言うことは、篠山がこの地方の中心地だったということで、歴史のある町だと分かる。

この通りを 600m 程行くと T 字路で右折して河原町へ向かう。そこは立町通り商店街でやはり漆喰仕上げの酒蔵、パン屋さん、お寺の土塀、中にはとても立派な大きなうだつが上がり、棟が並んで建つ家など豪邸が並んでいた。中でも「小田垣商店」は丹波篠山の黒大豆を扱うお店で、平屋なのにあえて中二階建てで漆喰仕上げと贅を尽くした造りだった。お店と自宅は少し離れ、その間は漆喰仕上げの土塀が庭のこれも大きな木々を囲んでいた。まさに大豪邸と言えるもので、黒大豆御殿だと思った。

④ 河原町の妻入商家群

黒大豆御殿のすぐ先に交差点があり、そこから左折すると河原町の妻入商家の建ちな

らぶ通りになる。ポケットパークがあり商家群の案内塔も立っているし、街路灯にも「河原町妻入商家群」の看板が付いていた。



漆喰仕上げの妻入りの家が並ぶ商家群

しかし、残念ながらこれまで私は「河原町妻入商家群」について知らなかった。特に妻入の意味が分からなかったのだが、この通りを歩いて気がついたことがある。普通の商店街は通りに対して平行に建物が建っているが、ここはどこも家の長辺が通りに直角になっていることだ。江戸時代の城下町は家の間口の広さで税金が決まったので、間口は狭く奥行きが深い造りになっている。帰ってから調べてみると、普通の家は山形の形状をした屋根でこれを切妻屋根と言う。この建物の呼び名として、長辺側の面を「ひら」と言い、短辺側の面を「つま」と言う。そのため建物のいずれの面にも出入り口があるかによって分類し、「平入り」は「ひら」の側にも出入り口があるものを指し、「妻」側から出入りするものを「妻入り」という。この妻入りの建物が続いていると、道路に対して圧迫感がなくなじみやすい街並みを造ると言われている。通りに電柱こそあったが、同じような家がずらりと並んでいる風景は確かに落ち着きを感じられた。二階の部分はもちろん、平屋でも屋根下のところはみな白い漆喰仕上げに揃っているのが美しいと思った。

⑤ 松平康重が五万石の初代篠山藩城主

集合時間が迫ってきたので、さんぽまつぶを確認して武家屋敷群の見学はあきらめ、次は篠山城跡へ向かうことにした。篠山城下町は慶長 14 年(1609)に、徳川家康の命による天下普請によって築城されました。これは山陰道の要衝である丹波篠山に城を築くことで、大阪の豊臣氏初め西国諸大名の抑えとする狙いがあったとされています。そして、松平康重が五万石で入封し篠山藩が誕生しました。その後は青山忠朝をはじめ青山

家が6代続き、明治に至りました。平成16年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、篠山城を中心に武家町や商家町など近世城下町の情緒を今に伝えています。



登場門から見える大書院の屋根



400m 四方を囲うお濠と石垣

お城は盆地に築かれた平山城で、一辺が約400mの外堀に囲まれた正方形、天守閣はなかった。お城まで戻ってくると、北堀ぞいに白い素敵な建物が並んでいる。市役所と「たんば田園交響ホール」だという。四万人程度のそれも山あいの街にしては素晴らしい施設を持っているものと感心した。後で分かったが観光案内所の前にあった「大正ロマン館」は、大正12年(1923)に篠山町役場として竣工したものと言う。今は篠山の観光拠点として、お休み処や丹波篠山のお土産の売店やレストランがあるそうだ。城下町のお城を核に、武家屋敷跡、歴史美術館、妻入商家群など見どころ一杯の町づくりを進めているのがうらやましい。



お濠から見た「たんば田園交響ホール」



昔の役場「大正ロマン館」

⑥ 京都二条城を模した大書院

城跡に到着すると石垣の上に屋根だけ覗かせているのが大書院、二の丸跡にあった歴代城主の公式行事に使用された場所で、正規の書院造となっていたという。廃城後もこれだけは残されたが、昭和 19 年の火災で焼失し平成 12 年に再建されました。

内部は見学できませんでしたが、二の丸、三の丸、本丸跡をぐるりと回ってきました。それで分かりましたが、本丸には建物はなかったのです。お濠からそびえたつ石垣は最も高いところで高さ 17m という。そのお濠脇には桜も植えられて、石垣が続く風景に日本らしさを感じました。

そして、14:30 すべての見学を終えて篠山を離れました。